

いらだちと悲しみで激しく泣いていました。創造の初め、地を従え、すべての生き物を支配することを神が委ねられた全人類の父祖アダムは、どこにいるのか？ 彼が地を相続することはできないのか？ とヨハネは思ったかもしれませんが、しかし、アダムは罪のゆえに、地を相続する権利を失ったのでした。ルツ記に格好な例証が語られているように、以前の所有者の親類の者だけが地を買い戻す権利があるわけですから、そのような資格を満たすことのできる者は随分限られることとなります。天の御使いではその資格を満たすことはできないのです。それでは、アダムに代わる「買戻しの権利のあるだれか親類の者」はいないものか？ と、ヨハネが途方に暮れていると、長老の一人が、「見なさい。ユダ族から出たしして勝利を得たダビデの根」なる王がいるのではないかと励まします。そこでヨハネが示されるまに見たのは、しかし、百獣の王たる獅子ではなく、弱々しい「ほふられたと見える小羊」でした。かつてイエスはイエスを約束のダビデの血筋の王、メシヤ（救い主）と認めようとしなかったパリサイ人たちに、ダビデの子孫に生まれるはずのキリストを、すなわち、まだ当時は生まれていなかったキリストをダビデは御霊によって「主」と呼んだという不可思議、逆説を指摘されました（マタイ 22：41-46）が、ダビデの時代よりほぼ千年後にダビデの生まれ故郷でありダビデの町と呼ばれたベツレヘムで御降誕され、十字架上で全人類の救いのために贖いの死を遂げられた犠牲の小羊、イエス・キリストこそ「苦難のしもべ」であり、同時にダビデの血筋の「ユダの王」であったのでした。獅子に象徴されるユダ族からダビデの血筋の王が救い主として生まれ、永遠の国を治めることは、イスラエルの族長ヤコブ、預言者サムエル、ダビデ、イエスの母マリアへのよく知られた預言はじめ、多くの預言で語られてきたことでした。実際、弱々しくほふられたと見えた小羊は、力のみなき一歳の雄羊（出エジプト記 12：5）で、「七つの角」と「七つの目」に象徴される完全な力と完全な監視眼で、全世界にくまなく遣わされた神の七つの御霊によって、地上のすべてのことを見通していた、獅子にも匹敵する王者たる貫禄を備えた方でした。

この「神の小羊キリスト」こそ、最初の血肉のアダムに代わってこの地の相続人「生かす御霊」（コリント人第一 15：45）となられた「最後のアダム」だったのでした。それは十字架上で犠牲の死によって流されたご自分の血の代価で、この世をご自分のものとして買い取ってくださったことによって初めて、達成されたことでした。

罪に汚れたこの地、この世の人々がキリストによって贖われ、神の国が設立されるために、ついに人類史に最後をもたらすことになる神のご計画が、その「巻き物」には書かれているに違いないのです。今や「巻き物」が解かれるかどうかは大問題です。解かれなければ、邪悪なこの時代は引き続き現在のまま存続することになるからです。人類史の最後に、神以外の支配体制をすべて打ち砕き、神の体制に置き換えるために必要な聖めの一連の災いを始めるには、封印を解く権利のある者が必要なのです。果たして神は、この資格のある唯一の方、王であると同時に苦難のしもべなるイエス・キリストを人類の救いのためにすでに創造の始めから備えていてくださったのでした。さて、サタンの邪悪な体制について終わりを告げる方の到来で、四つの生き物、二十四人の長老はじめ万の幾万倍、千の幾千倍という数知れない御使いたち等天界の被造物の喜びは絶頂に達しますが、聖徒たちもこの喜びに大きく貢献する役割りを果たすこととなります。小羊が巻き物を受け取ったとき、「香のいっばい入った金の鉢」が小羊の前に差し出されましたが、「この香は聖徒たちの祈り」なのです。信仰によってキリストに贖われた者たち、すなわち、キリストの証し人たちは、神への真剣な祈り、執り成しを通して神の贖いの業に関わっているのです。パウロは「すべての人のために、また王とすべての高い地位にある人たちのために願い、祈り、とりなし、感謝がささげられるようにしなさい。．．．そうすることは、私たちの救い主である神の御前において良いことであり、喜ばれることなのです。神は、すべての人が救われて、真理を知るようになるのを望んでおられます。神は唯一です。また、神と人との間の仲介者も唯一であって、それは人としてのキリスト・イエスです。キリストは、すべての人の贖いの代価としてご自身をお与えになりました。これが時至ってなされた証しなのです。」（テモテ第一 2：1-6）と、キリスト信仰の真髄となる真理を語ったとき、祈り、執り成すことを勧めましたが、祈り、執り成し、感謝を通して私たちも、神と御子が連帯で関わられた全人類の救いの業に参加することになるのです。

ここで天界の被造物は、御座に座っておられる方と小羊の前にひれ伏し、「新しい歌」を歌って礼拝しています。目の前の方が神であるから、その方が御座に就いておられるから、その方が贖いの業（十字架の死と甦り）を成し遂げてくださったから、彼らは喜び、大合唱で礼拝しているのです。人類のためにキリストが犠牲の死、罪の縄目からの解放、救いのすべてを達成してくださった今、キリストの証し人たちは王になり、祭司になり、キリストと共に地を治める者とされたのです。このような素晴らしい新生の一世、時代、人々の幕開けに、賛美と誉れの新しい歌を歌わずにおれましようか。王であり祭司でもあるという職務兼任の資格は、メルキゼデクとキリストにだけ許されたのでしたが、神の国ではキリストが約束されたように、キリストの勝利に与った者たちが、晴れてこれらの役割りを担うことになるのです（マタイ 9：28、コリント人第一 6：2、etc.）。「ワーシップ **worship**」という英語は、どんなに価値があるかを意味する '**worth-ship**' から派生したものです。創造者のみをご自分の造られた被造物から礼拝され、賛美される価値のある方であることは明らかです。天界での新しい歌の大合唱は天使たちも加わって壮大なものとなります。「力」「富」「知恵」「勢い」「誉れ」「栄光」「賛美」すべてを受けるに値する方は、言うまでもなく、創造者なる神のみなのです。今や全被造物の崇拜の対象は、天地の創造者である唯一なる神「御座にすわる方と、小羊」で、このとき小羊なるキリストの神性はだれの目にも明らかな紛れもない事実となります。人間史の現時点では、すなわちサタンがまだこの世を誘惑することができる間は、キリストはまだ「万物をその足の下に従わせ（て）」「おられるので、「天におられる大能者の御座の右に着座（して）」大祭司として執り成しをしておられるのです（ヘブル人 8：1）、「敵がご自分の足台となる」日には、「イエスの御名によって、天にあるもの、地にあるもの、地の下にあるものすべてが、ひざをかがめ、すべての口が『イエス・キリストは主である。』と告白して、父なる神がほめたたえられる」ことになるのです（ピリピ人 2：10-11）。ハレルヤ！